

秋分儀式

I O S 儀式魔術文書 AE97



THE OFFICIAL ORGAN
OF
I O S
PUBLISHED IN CLASS D
IMPRIMATUR: M FRATER I O S

1 準備

事前にシナリオを何度も熟読すること。覚えられないと思ったらテープに吹き込んで用いても良い。

静かな場所で椅子に座り目を閉じて呼吸を整え弛緩する。心身の緊張がほぐれたら、中央の柱の瞑想を行う。ケテルからマルクトまでを活性化し、五つの光球を強く輝かせる。

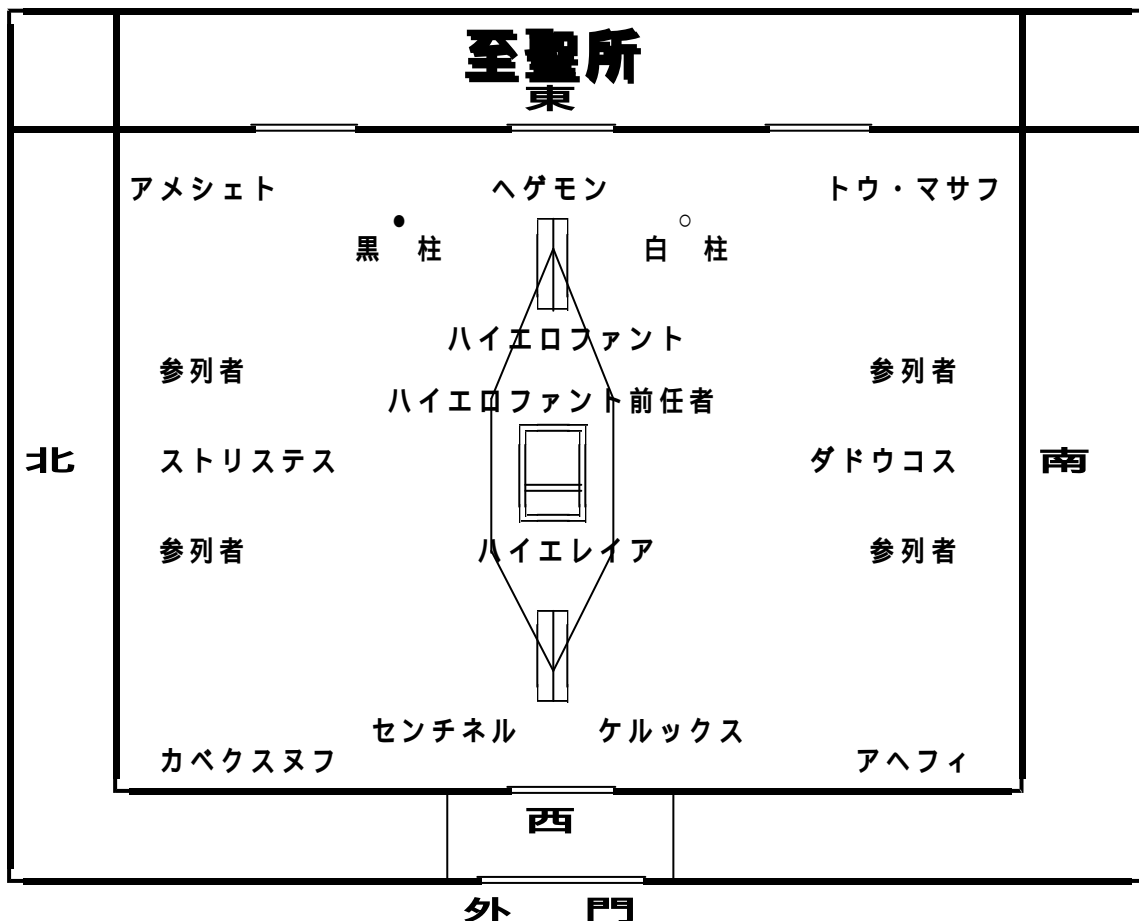
次に座ったまま光の法衣をまとう。
 「神殿の奥津城に至聖所を隠すがごとく、わが法衣にて高次の自己を包むべし。」
 次に同じ色で輝く光のネミスをまとう。
 「神殿の高き塔のごとく、高次の自己を宿す王冠に光背をまとわん。」
 最後に、青白く燃える冷たい焰のサンダルを履く。
 「月と太陽を履き、その踵より両界を越える翼の生えいでん。」
 これで準備は完了した。

2 マルクト神殿

座ったまま、眼前に神殿の入り口を視覚化する。右に純白のヤキンの柱、左に漆黒のボアズの柱、正面には青銅の両開きの扉にI O Sの飾り文字が浮き上がっている。

肉体を離れて光の法衣をまとったまま、神殿の扉の前に立つ。位階のサインを行え。サインを行ったまま、パスワードを唱える。I O Sの飾り文字が内側から輝きはじめ、神殿の扉が左右に開く。

迷わずに中に入りなさい。細長い通路を進むと次の扉が自然に開き、マルクトの神殿に入る。正方形の神殿内部は東に向かう奥の壁には三つの扉が至聖所との間を隔て、その中央の扉を挟むように高さ2メートルほどの白と黒の柱が立っている。左右の壁には三つのランブが内部を照らし、背後の壁は今あなたが抜けてきた扉がひとつだけ空いている。神殿の床は白と黒の市松模様のタイルが敷き詰められ、その中央部をほとんど塞いだ巨大な船が船首を東に船尾を西に向けて鎮座している。船首と船尾が高く反り返り、半月刀を地面に寝かせたような船体の中央部には、ハイエロファント前任者の座した棺が固定されている。その船首と船尾には、船首飾りを手にハイエロファントが、舵柄を手にハイエレイアが立っている。これは 太陽と月の船 である。



神殿の東西南北には通常の四大旗の代わりに、エノク語の文字を方位の色で縫い取った旗が掲げられていた。
すなわち、東には、ナ・ハス が紫の生地に黄色で縫い取られ、
南には、ヴェー が緑の生地に赤色で縫い取られ、
西には、ゲル がオレンジの生地に青色で縫い取られ、
北には、パル が白の生地に黒色で縫い取られていた。
司官が定位置に立つ。
全員が揃った。儀式が開始される。

3 儀式

ハイエロファントが 太陽と月の船 の船首から、東を睥睨して宣言する。
H t 「ヘカス・ヘカス・エステ・ベペロイ。ここに神殿を開かん」
ヘゲモンは、カバラ十字を切り、両手を船に差し伸べる。
H g 「Ateh Malkuth ve Geburah ve Gedulah le Olarm Amen.
Pater eius est sol; mater eius est luna.
太陽は父なり、月は母なり。」
H g の宣言とともに、神殿の東の壁が消滅し、日没直後の急速に光を失う東の空が現れる。遠方から冷気を孕んだ風が神殿に吹き寄せる。その風にはわずかな潮の香りがまざっているが、待つほどにその潮の響が強くなる。
ダドウコスはカバラ十字を切り、両手を船の右舷に差し伸べる。
D d 「Ateh Malkuth ve Geburah ve Gedulah le Olarm Amen.
Pater omnis telesmi totius mundi est hic.
森羅万象のよきものの父なり。」
D d の宣言とともに、神殿の南の壁が消滅し、遙か彼方の地平線に赤い帯が走る。日暮れの残照である。太陽の黄金の光のかけらが煌めく。
ハイエレイアは、カバラ十字を切り、舵柄を再び握って言う。
H r 「Ateh Malkuth ve Geburah ve Gedulah le Olarm Amen.
Separabis terram ab igne,subtile ab spisso,suaviter,magno cum ingenio.
汝は熟達のわざで火から地を分かち、
濃密なるものから精妙なる甘きものを分かちたり。」
H r の言葉とともに、神殿の西の壁が消滅し、大いなる波音が響きわたる。センチネルとケルックスの守る神殿の入り口間際まで白濁した大波が押し寄せる。今や完全に闇に没した西の空に、犬狼星がひときわ鋭い輝きを放つ。
ストリストスは、カバラ十字を切り、両手を船の左舷に差し伸べる。
S t 「Ateh Malkuth ve Geburah ve Gedulah le Olarm Amen.
Haec est totius fortitudinis fortitudo fortis.
こは強きもののなかの全き強きものなり。」
S t の言葉とともに、神殿の北の壁が消滅し、暗い山脈が聳えたつ。山陰に青ざめた三日月がかかっている。やがてその黒い影も雲のなかに消えた。
いまや神殿の四方の壁はすべて消えた。正方形の白黒市松格子模様の床が波に洗われながら、見渡す限りの大海原のなかに漂っている。
H t は、東を向き両腕を翼のように広げる。
H t 「Domine Dominus noster quam admirabile est nomen tuum.Hoor, Ra-Hoor!
主よ、われらが主よ、汝の名のいと麗しきこと。ホルス、ラー＝ホルス」
左右の空に微かな月光に照らされて、鱗雲が走る。あたかも巨大な翼が南北に広げられたように。
H r は、左手で舵柄を握りながら、右手で天を指す。
H r 「Venite, Ra-Hoor, deus gubernat navem.
来たれ、ラー＝ホルス、主は船を舵取る。」
床がぐらりと揺れた。神殿の床は、海面を滑るように東へ進み始める。波音のみが高く響くなか、最後に残った床面を見下ろし、王座型の棺に包帯を厚く巻いて座らされたハイエロファント前任者が重々しく宣言する。
P H 「Sic mundus creatus est.
かくも世界は創られたり。
されば、旅立たん。」
その瞬間、床を形作る白と黒のタイルがばらばらに崩れ、その下から真っ青な海水が吹き出した。足下のタイルが水中に隠れ、膝まで海水が洗うと、各人の足下から海面を押し分けて、太陽と月の船を小ぶりにした一人乗りの小舟が出現する。ヤキンとボアズの2柱は静かに水没した。参加者の数だけ出現した小舟が舳先をそろえ、東を向く。ひととき大きな太陽と月の船も艫を突き上げるように滑りだした。
神殿の最後の欠片が消え去った。アストラルの大海のさなかに船の集団が航海を開始した。船団が見る間にかたちづくられる。H g の小舟を先頭に、それに続く太陽と月の

- 5 -

女神「旅人よ、コヘレベレベにようこそ。汝らを歓迎する。」

用心しつつ、Stは答える。

St「われらは太陽と月の船を守り旅するもの。御身は、言葉のとおりカボ女神なるや。願わくば、われらに祝福を与えたまえ。」

女神の答えは、墓場に響く風のように冷たい。

女神「知らざれば知れ。すべての女神は一にして、わが三相の容貌は、宇宙の営みなり。来たれ、生のうちに死あり。見よ、死の奥に生あり。」

手招く老婆の目が火の光を放した。Stはすかさず、円盤を高くあげ、地の追儼五芒星と星の受動の追儼の五芒星を描く。

St「神聖なる女神の名前カ＝ウラ＝オ＝ケ＝アヒ、火の赤さによりて、

ペレ女神よ、汝の本然に還りたまえ。

万物の生命力の守り手、カマプア・アよ、われらの旅を守りたまえ。」

老婆の白髪が逆立ち、その服地が灼熱の炎を放した。周囲の草木が水蒸気と白煙を放して消滅する。老女の姿のペレ女神がたつ場所に火柱があるが、大地が裂けて、深紅の溶岩流が噴出した。粘性の強い溶岩は、半球状に盛り上がる溶岩のドームとなる。この小山の丘ほどもある溶岩のシャボン玉が炸裂すれば、周囲の森や大地、わけでも湾内の山々も無事には済まないであろう。

そのとき、巨大な咆吼が火柱と化したペレ女神を襲った。森がそのまま出現したような巨大な猪である。左右の眼窩に、四つづつ、計八個の目をもつ巨大な猪は、おそれる風でもなく溶岩のなかの踏み分け、ペレと戦う。これはペレの宿敵、大地の王カマプア・アである。かれの周囲に突然、大量の雨がふり注ぎ、溶岩の熱を中和する。山の方角から鉄砲水のような流れが押し寄せ、ペレの手勢と激突した。水蒸気爆発が連続的に発生し、船団を衝撃波が襲う。ペレが雷神カネヘキリを呼び寄せ、猪の上から火花を散らせた。しかし、着分厚い毛皮植物の層に覆われ、カマプア・アは痛みすら感じないオウロは大地を砕いて、普く小規模な爆発を起こす。しかし、溶岩流を素足でわたる猪の強靱な皮膚には効果がない。

今や猪と業火、溶岩流れと鉄砲水が互角に組うちを演じていた。戦場と化した島から船団は押し出される。稲妻と火炎、豪雨と咆吼の乱舞するコヘレベレベの島を見ながら、Hrは四度目の舵柄を強く左に押し、船団を東に向けた。生命と実りの象徴「猪の王」と、死と変化の象徴「火の女王」は、凄まじい音と光を放して戦いつづけていた。しかし、少し離れた海面から眺めると、それは神と女神が睦言を交わしながら、激しい性愛を貪っているようにも見える。いつしか、巨大な猪は、草の葉を編んだ質素な腰巻をつけ、半裸の巨人となれど、かれの頭はみずみずしい植物の葉が冠のように覆い、胸と腕には鱗のように入れた墨があり、黒い髪と肩から腰まで覆う漆黒の体毛が、森の獣の性を留めているようだ。一方の女神は白髪頭がみずみずしい黒髪、溶岩の冷えて固まった大地の色に変わり、そのオレンジ色に輝く肌は、男神の黒い腕や足にからめとられ、あるいは逆に組み強い。

生命は流転する。ひとりの生命体の受胎、誕生、成長、死のプロセスは、その一部に過ぎない。巨大な生命の流れが、マナの輝きが、すべてを包んで時の大河を動かしている。

東の空に巨大な翼があらわれた。ひとつなぎの雲からなる翼は、ホルス神の鷹の顔、人の顔、幼子の顔を宿して、生まれいようとする太陽に爪を伸ばしている。

この旅路で再度見る夜明け前の曙光が、上空のホルスの姿をした黒い雲に迎えられ、たなびく白い積乱雲のなか包みこまれて出現した。黄金の夜明けを盛る白い杯に、翼の王が爪先にぶら下げた深紅の短剣をふりおろすようにも見える。その短剣から、血のごとく赤い光の欠片が滴ったとき、世界を日輪の最初の光が照らし出す。

すべての船団は消え、足下に市松模様の床が生まれ、青い海はアストラル・ライトのなかに埋没した。魔術師たちはマルクト神殿の定位置に立つ。小舟はおるか、太陽と月の船も消え。神殿の中央には、祭壇が出現し、それを挟んで祭壇の東にPHが、西にHtが対峙している。

HtがLVXサインを描いて言う。

Ht「Offerimus tibi, Domine, Calicem Sanctum.」

PHが薔薇十字のサインを描いて言う。

PH「Per Dominum Lucem et Tenebraum. Amen」

参加者は順番に神殿の出口に向かい一人づつ去っていく。自分の番が来たら祭壇に軽く一礼し、まっすぐに通路を抜けて神殿の外に出る。

自分の肉体のある場所をイメージし、光体を速やかに肉体に吸収させる。

目を開き立ち上がり、ヴェールを閉じるサインを行いなさい。

速やかにカバラ十字を切り、意識を地上に接地させる。

魔術記録を残すこと。

4 ポリネシア神話に関する小解説

(1) ペレ女神

ハウメア（ヒナ）大母神の次女、火山の女神。群発地震はペレが地底を移動して、島々の火山に命令して回るからだという。姉である海の女神ナ＝マカ＝オ＝カハイとは、熾烈な争いを繰り広げており、溶岩流は常に海に阻止される。姉の方が強い。

大地の生命力を体現する男神カマプア・アとも宿敵の仲である。

ペレは少女、（妊娠した）女性、老婆の3相をとって現れる。黒髪のペレは火山活動の休止状態を、白髪のペレは燃え上がる白熱の溶岩流をあらわす。

(2) ナ＝マカ＝オ＝カハイ女神

ハウメアの長女。水の支配者である。エ＝カ＝モアナ＝ヌイなる別名をもつ。

(3) カ＝モホ＝アリ・イ神

ハウメアの長男。鯨の王、漁師の守り手であり、死のもたらし手でもある。長女との戦争に敗れたペレをハワイ島に運ぶ。

(4) カマプア・ア神

八つ目の猪、湿気と生命のもたらし手。精力絶倫で、ペレと妹のカボが歩いていると、これを襲った。カボが取り外し可能な女性生殖器をもっていたので、コヘレペレベ（Detached Wagina）を投げつけられて、騙された。怒ったペレが火攻めにするが、海に逃げてフムフム＝ヌクヌク＝ア・プア・アという熱水のなかでも生存できる魚に化けて逃げた。通常は、猪、人間の男性、植物、魚の姿であられる。

VERBORUM PUBLICA
I O S
RITUALE DE
AEQUINOCTIO AUTUMNO

IMPRIMI POTEST: I O S
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR
IMPRIMATUR : M.E.S.A. 5=6
MARTIUS MCMXC

秋分儀式 AE97A

Copyrights © All rights reserved I O S 1997
1997年8月20日 I O S 発行

本文書は、複数のまたは個人の団員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I O S の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンブル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I O S の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。